

東日本大震災による 宮城県 気仙沼 (有) 阿部印刷への支援物資輸送 (用紙) と現地視察レポート



出発

平成23年7月2日土曜日～7月3日迄

東京都印刷工業組合城西支部青年部有志8人（橋本、小泉、米澤、浜本、萩原、玉城、山浦夫妻）による支援物資の運搬と現地視察を兼ね、7月1日深夜から土曜午前中到着予定としてトラック1台ワゴン車1台（乗用車1台）で向かう。



途中ICで合流し、打ち合わせをしながらトラックとワゴンの荷物配分を振り分ける。ワゴン車に交代する運転手の休憩スペースを確保した。

トラックには有志が集めた用紙、PC、スキャナ、プリンタ、雑貨など、必要と思われる物資を積み込み、深夜の東北自動車道を北上して行く。

関東ではあまり感じなかったが、東北へ続く自動車道は地震の影響で、今でもアスファルトやガードレールが波を打ったような場所や、ヒビ割れした部分が目立つ。

途中のサービスエリアにて、運転手を順番で交代し、安全な輸送を心がける。

東北自動車道からの現地入りの際、地震の影響で崩壊した建物や残骸を見かける様になったが、震災から既に3カ月余りにも経っているのであまり地震の傷跡を確認する事はなかった。夜が明けて街中を走行しながら、気仙沼市へと向かう。



被災地

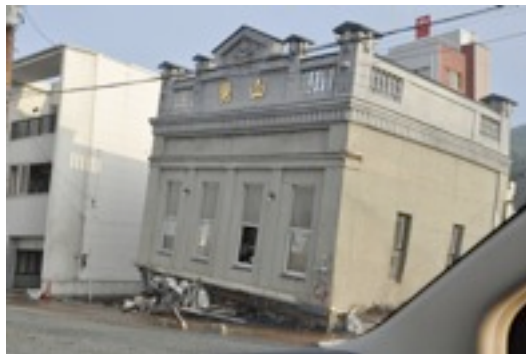
「ありふれた街並み」を港へ向け下って行くと、突然世界がガラリと変わる。津波で破壊された建物や残骸が、道一つ隔てて明暗を分けて居る。



漁港として賑わっていた気仙沼市八日町の港。津波によって破壊された、道路、建築物、船舶、自動車の瓦礫と化した風景が、パノラマになって現れた。



鉄筋コンクリートやアスファルトが砕け、まるで戦場かなにかに迷い込んだかのような錯覚さえ覚えた。破壊された道路のあちこちに水溜まりができています。



鉄筋コンクリートの建物が一階部分を破壊され上階が置かれた状態野建物。現地の人に教えてもらわなければ一階建ての家屋だと思ってしまっただろう。



海拔が低くなっているせいか、海水が地面からにじみ出てきていた。

震災前は漁港として、観光地としても賑わっていた場所が、建築物が、瓦礫と化していた。津波の凄まじさ、恐ろしさを感じた。



「港町ブルースの歌碑」が押し潰された様な形になっていた。港は整備され公園化されていたはずだが、栈橋は無惨にも引き千切られ、船はうち上げられていた。

この時、地元の人達が集まり始めて居た。その中の一人に話しかけられ、現状を聞く。この有様を見て、写真を撮り、有りの尽に伝えて欲しいと言っていた。地震での地盤沈下によって海拔が低くなり水没してしまっている。

その為に道路を押し上げてなんとか進める様になったらしい。

そして南気仙沼のJR駅の所を見てくるといいと言われ、向かってみることにした。



途中道が水没していたりとほとんどの道が途中で無い。進めない状態。 それでも何とか向かってみると、そこには半分以上水没した「JR南気仙沼駅」の看板が見えた。駅前繁華街であった場所は、水没して瓦礫しかない。自動車の残骸には詳細データの書かれたメモが貼付けられている。



道路と建物の高低差に違和感があるのは、道路を補強して高くしたからだろうか。低くなった土地はいたるところから潮水が湧き出て手のつけられない状態になっていた。その「池」の底から泡がたっていた。水中で腐敗が始まっていて悪臭が出ている。



被災した小学校は瓦礫置き場になっていた。運動場には無数の自動車の残骸が何段も積み上げられている。



牡蠣の加工工場だろうか、無数の貝殻が散乱していた。腐敗臭と1センチ以上ありそうな無数のハエ、ハエ、ハエ。



道路まで流されてきた漁船。まだ使えるのか、つかえ棒で支えて倒れない様にしていた。

午前8時頃に差し掛かり、一行は阿部印刷へと向かう。



阿部印刷



入り口で迎えてくれた阿部印刷の阿部孝市氏は、とても疲れている様に見えた。

阿部印刷は三階建の建物に印刷所が一階にあった。

物資の荷を降ろす前に一階工場を見せてもらう。元はオフセット印刷機や断裁機、製本機等があった場所が、今は撤去されて何もない空間になっている。津波による浸水は今まで設備投資した全てを駄目にした。浸水は天井まで届いていた。壁は剥がされて、骨組みが



むき出しのままになっていた。神棚が流されず残っていた。

地方の印刷所は、東京の印刷所とは違い、全てを揃えなければ商売として成り立たない。協力業者が周辺には無い為だ。

使えなくなった機材は撤去してもらったが、設備投資したローンは残っている。など、営業を再開する為には色々と問題が残っている。云々。

それでも何か地元の為に行動を起こさなければならないと起ち上がった阿部氏の始めた事は、まず、阿部印刷玄関先に張り出した掲示板であった。安否情報、移転情報などが張り出されていた。



右写真の壁に赤いペンキの○（マル）は、自衛隊が付けていったものだという。その下の白文字のcrはクリア。マルが生存者確認、チェック済みという意味合いだろうか。振り返って周りを見ると、建物すべてが同じようにチェックされていた。





津波直後の説明をする阿部氏。 ここまで浸水していたと指をさす。
その時に撮影したコピーをみながら、なす術もなく二階の窓から外を眺めるしかなかった
当時を振り返っていた。

そして現在、「気仙沼復興マガジン」というフリーペーパーを創刊し、地元の連絡係として、
経済復興としての第一歩を歩き始めている。そしてそれまでお互いをラバル社として
しかみていなかった地元同業社とも連絡を取りお互い協力を約束した。



リソグラフとオンデマンド印刷機のみでの再開である。

今回我々が届けた物資はその復興マガジンを作る為の用紙などである。現在リソグラフと
オンデマンド機のみなので、「A3かB4の規格サイズ」。リソグラフでも使える上質紙と

いう要望だった。



トラックとワゴン車から
支援物資を降ろす青年部
有志たち。無事届けられた。



支援物資は用紙だけではなく、今回気仙沼までは来れなかった東京の仲間達からの寄付等も数多く入っていた。全国から届けられた団扇や復興マガジンの説明をする阿部氏。本格的に事業を始めるにしても、この場所はいつ退去命令がでるかわからない。その中での再出発である。そのなか、阿部氏は山浦印刷株式会社の山浦氏が携わっている、「中小企業家同友会」の元会員であった事が判明し、しかも7月に同友会で企画している東北支援プロジェクト「熊谷郁美トーク&ライブコンサート」の熊谷郁美さんとも知人関係であった

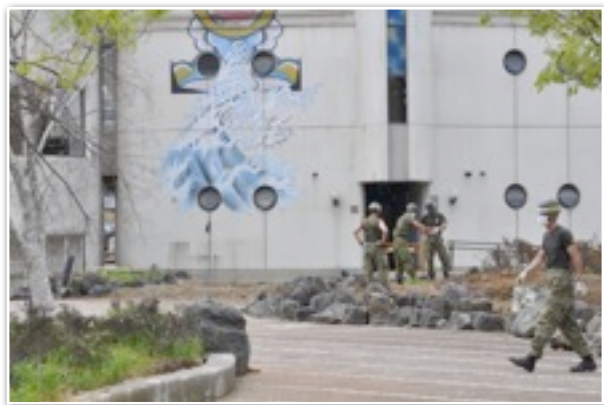


事が判明し、「縁」というものを感じた瞬間であった。

この後、阿部氏の案内により気仙沼市の被災の現状を見に行く。

被災地視察

今も町の至る所に自衛隊の皆さんが瓦礫の片付け作業をおこなっている。





震災当時のTVニュースで炎に包まれていた船舶が横付けされていた。

船体が焼け黒焦げになった船舶。

海を見渡せる高台には報道取材陣がカメラを設置したホテルがある。ほとんどが報道関係の宿泊客だと言う。



カネカシーフーズの工場とその周辺

気仙沼市は漁港でもあり、水産物の加工業が盛んな地域でもある。フカヒレ等は全国から集められてくる。河に面した工場はほとんどが破壊されていた。更地の様になった場所には震災前にはコンビニエンスストアが建っていたと言う。

橋から向こう側は通行止。9時過ぎてから工事の為の大型トラックが行き交っていた。



被災前の出荷用のトランクコンテナが崩壊して積荷が散乱していた。フカヒレの加工物であった。それがあちらこちらにあった。それに群がる無数のハエ。その巨大さ。そして海産物が腐敗した凄まじい悪臭。



無数のハエは街中、大量に発生していた。



それを餌にツバメやカラスなどの鳥類がたくさん集まってきている。水産加工工場の残骸は、大小いたるところに見えた。

ほんの数メートルの高低差の違いや、林など位置によって被災が少なかった地域もあれば、津波の直撃で破壊された鉄骨の工場まで。

未だに危険なので立ち入る事ができず、内部の搜索が終わっていない所もあった。





高台で津波を免れた家屋や、低い谷沿いで津波が通った場所。



次は避難施設へと案内してもらった。

避難施設・仮設住宅

高台に位置する地元中学校施設は避難所、仮設住宅、ボランティアの活動拠点。そして自衛隊支援部隊の基地などの重要拠点でもある。

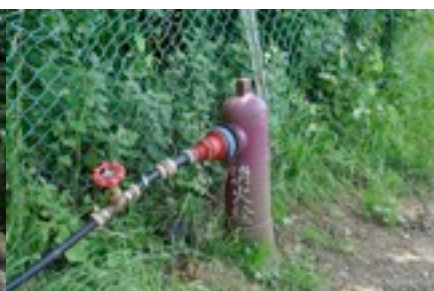
今回は阿部氏のはからいで一般人が入れない所まで視察する事が出来た。一行は被災者がどのような暮らしをしているのかを実感する機会となった。



校庭には仮設住宅と駐車場が設置されていた。



仮設住宅はプレハブで作られ、入居から2年間は住む事ができる。ただ、抽選で入居できるのはごくわずかであり、まだまだ住宅面では全然足りていないのが現状。そして入居するという事は、自活しなければならない。仕事が必要だ。



電気やガスは復旧したが、水道はいまだ復旧の見込みはない。消火栓を利用した共同の生活用水、洗い場が作られていた。

避難施設だけではなく、学校も休校することなく生徒達は狭いながらも、クラブ活動に精を出していた。



自衛隊によるお風呂場の設置などや、ドクターヘリ等に使われるヘリポート等があり、被災地での前線基地という位置づけなのだろう。

気中体育館避難所の本部、「受付」と書かれている。体育館は行き場のない被災者の仮住まいとして、全国から集まってきたボランティアのキャンプ地、そして何より目を引いたのが、掲示板・メッセージボードの活躍である。



すべての情報が掲示板へ張り出される。身元確認、住宅募集、就職活動、全国から送られてきた応援メッセージ、ほとんどが紙媒体で張り出されていた。



幼児の遊び場も段ボールで囲い作られていた。七夕飾りが切実な願い事とともに飾られていた。



運動場。地方の運動場はとても広い。子供達の部活の隣でミュージシャンがPV撮影を行っていた。義援イベントの一環だろうか。芸能人の炊き出しイベントなどは落ち着いてきているが、時々プライベートで訪れてはミニライブをしてくれて、ひとときを和ませてくれているらしい。



運動場を超えると、被災者が避難している体育館があった。校舎の片隅には仮設トイレが設置されている。下水や処理場が被災したため学校のトイレが使えない。



テントはボランティア、段ボールで仕切られた場所が被災者のスペース。ボランティアで床屋を開いていた。あまり風通しがよくないようで、本格的な夏を迎える頃の暑さが心配だ。



全国から送られてきた支援物資が積まれている。励ましの手紙、などなど。

子供達が集まって、ネットをみていた。インターネットはあまり被害がなかったらしく、阿部印刷でも、電気が復旧した時にはネットも繋がったと話していた。



役割分担を張り出したボードや、励ましのメッセージ、生活保護や、保険、住宅、雇用などの手続きのコーナーや、被災者の生活に必要な様々な情報が集結している。



自衛隊の作ったお風呂場。

午後を回り、阿部社長にこれからも何らかの協力を約束し、固い握手をして別れを告げ、一行は気仙沼を後にした。





阿部印刷の周辺の様子。老舗のお茶屋さん。以前観光で訪れたとき、この周辺は観光客や、地元の人達で賑わっていた。地元でとれた鮮魚を出してくれる飲食店や居酒屋など、テレビでも紹介されていた。

南三陸海岸から仙台へ

気仙沼から宿を予約している仙台へと向かう。この地で何がおこり、どうなったのか、そして今どういう状態なのか、車上からでもできるだけ現状を自分たちの目で見するため、海岸線に行くルートで仙台へ向かう。



南三陸の漁村や町のほとんどが津波によって犠牲になっていた。高台にある農村は無事なところもあったが、ほとんどの村が瓦礫と化していた。

ここは元々町があったのだからという、土台だけが残っていた。建築物、道、駅、線路がずたずたにされ田畑の奥まで流されていた。大きな町や、重要なポ



気仙沼レポート

イントは復興作業にかかって貰っていたが、小さな漁村はほとんど手つかずの状態。
その風景が仙台まで続く。



全く海の見えない場所でも、川沿いであったために津波が押し寄せて被害が出てる場所もあった。



高速に乗るまでの太平洋側海岸線の風景。仮設の橋がやっと掛かり、まだ何も片付けられていない地域を横目に進む。

地元被災者、自衛隊、警察、ボランティアなど様々な団体が瓦礫の撤去の仕事を続けているが、終わらない作業に、やっていて空しくなると聞く。高速で東北に向かう警視庁の特殊車両と東京に帰る車両を何度か見かけたが、向かう車両の人々の凛々しさと、帰り道の精根尽き果てて椅子にうずくまる姿が対照的だった。

復興支援は長期的な視点で、より多くの人々が関わらなければならないものなのだと、感じた。



やっと遊覧船が動き出した松島。まだ水面は濁り、砂浜は泥になっていた。

メ毛